

記 録

紛争座談会参加記

広大紛争に想う

名誉教授 今井日出夫

一、回顧

広島大学に文書館 ARCHIVES なる施設が出来たことを伝え、四〇年も昔の大学紛争の記録は既に殆ど破棄されているので、昔の事件の記憶掘起こしの為の座談会への協力方を文書館から依頼する書面を戴いた。

丁度一年前に広島北郊の新しいアパートに引っ越して、雑書類を整理し、不要な物を箱詰めにした儘、まだ捨てないで保持していた私は、家に残っている関係書類がありますよと申し上げ、大学紛争に関する座談会に協力することを安易に引き受けてしまった。丁度尾道大学の講義準備が一段落する時で、時間的余裕があったからかも知れない。然し月一回を原則とする会合も五回目を過ぎ七、八回目ともなる頃は、後期のレクチュアーノートの準備をするのがここ数年間の私の生活サイクルになっていたので、座談会に出掛けることが些か億劫になってきた。八八歳はもういい歳なんだと思うことが最近間々あって、年齢

を口にするのは老化の証、世の煩わしさからそろそろ引退すべき歳と自からは認めている。でも何かお前に仕事があるよと声が掛かると、まだ自分には使い途が残っていると感じ、もう歳ですからとすっきりと断わるには割切れない気持がする。そんな自分の優柔不断さが広大紛争解決に当って徒に解決を遷延する結果に繋がったかも知れないと又反省する。そして挙句の果ては、ままよなるようにしかならない、ケセラセラとなってやっと筆の運びが順調になる。読者よ、お許しあれ。

紛争の始まった頃、正確には一九六九年、世間からは早く処理して欲しいという声が高く、その要望は私の手許にも何度か寄せられた。とくに広大メインキャンパスのある東千田界限では時に直談判で迫られたこともある。しかし、一九〇五年以来のお付き合いが長い大学と町内との誼は強い。耐えに耐えてであろうが大学にも封鎖学生にも穏健な対応を求める声も大きかったのである。

二月に始まった紛争が七月にもなると開け放たれた窓から入る学生の早朝から夕刻に及ぶマイクの声は一層喧しい。キャンパス内の治安が悪いので子供や婦女の日常生活にも不安だとの苦情も出る。この声は封鎖解除後「広大は東千田から出て行け」という声に繋がったかも

知れない。

文部省は大学法案の原案を翳して、学生の反逆の取り鎮めを大学に迫り、育英会などの文部省外廓団体は運動家学生の奨学金停止といった実力行動で圧力をかけてくる。右翼、左翼の諸団体は自己宣伝の良き機会とばかりに、陰で様々な形で跳梁する。

広島大学では六〇年安保以来の学生運動の質的变化に対応して、補導委員会を改組強化した学生委員会を新たに作って対応しようとした。一九六九年三月、新委員会が動き始める前に学生団体は封鎖等の実力行使に打って出る。然し評議会は大学の最高議決機関であるにも関わらず、大学問題処理方針を明確に示す事無く、まして紛争処理の具体的手段などが提示されることも嘗て無く、徒に学生委員会の無能を批判するのみ。その事情は時の評議員による「会して議せず、議して決せず、決して行なわず」この自嘲とも取れる言葉にいみじくも現われている。三月半ばに至り学生委員長は委員会にも評議会にも出席されなくなった。その理由は分からない。大学紛争の盛上がりと期を一にして学生委員会は運営のトップが事実上いなくなったのである。後に残された委員は皆それぞれこそスケープゴートにされた気持ちで、副委員長の飯島氏ともう一人の副委員長であった私それに各部署から選出された委員の諸氏、互いに緊密に相諮りつつ、紛争に対処せねばならなかった。それから飯島学長の選出、引き続き新学生委員会を初めとする広報、改革等各種委員会の発足を経て八月を迎え、それまでに皆で考えてきた紛争解決パターンの中でも最悪のルートを辿り乍らも封鎖強行解除による解決へと事態は進んだ。

その間、全共闘派学生はどうだったのか。彼等は最後がどうなるかと飽く迄革命に殉ずると強硬な態度を変えない。自ら納得して態度を変えないのだから仕方ないというものの、私達はそれでよしとはできない。それは大人であり教師である者の立場である。何度も説得を繰り返し、最後に学長単独の説得にも臨んで頂いたが、彼等の主張は変わらない。我慢にも限界がある、遂に強制解除を迎えた。その時、彼我共に怪我人を出さぬよう、警察にも強い自制を求めたのであった。為に二日を要した大学本部棟の攻防の末、遂に全共闘残留組は投降した。後で多少の東千田界限の混乱はあったものの、大勢は沈静化した。

自他共通のせめてもの慰めは半年に亘る紛争籠城の間、一人の重傷者も、まして死者も自殺者も出なかったことであろうか。その間大学、教職員、一般学生の蒙った物的精神的損失は見積もるべくもない程大きい。それは長年に亘って自らが修復するより外に道はないであろう。

最後まで彼等のいう革命の砦に立て籠もった学生は、真に革命が成就すると確信していたのか、それとも彼等は白昼夢を見ていたのか、彼等は後になってもその真相を明かさないので疑問が残る。中国は文化革命の少し前、小型木鉄炉による鉄の大量生産に成功し、その生産高は米国に次ぎ世界第二位に躍進、偉大なる毛思想の勝利と喧伝した。然しその製品は量こそ多けれ、質的には昔からの農機具程度にしか使えない粗悪品であった。それどころか、そのために全国で多くの木材が伐採されて木炭に加工され、山は裸になり、その影響は全国的な洪水を招き、引いては穀物生産の激減による大飢饉、そして餓死者が溢れたとも伝えられる。それを強引に修飾美化し文化大革命と称し

て国外に広く宣伝しようで、それが全共闘運動の背景に繋がったと
の見解がある。その真相はともあれ、革命に挺身すると言って「革命」
に陶醉していた学生達、それを庇っていた少数の大人達の所業と考え
るなら、彼等が今も口を噤んで真相を語ろうとしない態度も分かるう
というもの、もしそうであるならば彼等こそ世の糾弾を受けるべきで
あらう。

自己の主張や利益にのみ狂奔する人達がいかに立派に自己を虚飾し
ようと、それで若者に人生を語り、価値観を説くことはできない。大
学は自己栄達場ではない。それは飽く迄研究と教育の場であつて、
そこで身を削りながらも人間性を磨きあげる場である。

この座談会の目的が昔を語って今を知ることにありとし、それを今
の何かの用に立てようと考えるなら、あくまで慎重に慎重を重ねて取
り扱って戴きたい。人夫々に百人居れば百通りの考えがあり、不用意
な発言はどんな災禍を招くか分からないからである。

大学紛争を取束させたのは誰か？どの機関か？今後同じ事は二度と
は起るまいと思えるが、似たような困難がいつ何時生じるかは予測で
きない世の中である。その時大学の困難を打開できるのは四〇年前と
同じく特定の個人による形でなく、間違ひなく多数の教職員・学生の
手による解決であらう。理由は四〇年前も同じであり、将来に亘つて
大学は良識の府であり続けると期待できるからである。私は昭和一九
年初めて文理大の教壇の片隅に立つて以来、今年で六四年目となる大
学での教師生活の経験を通じて、強い確信をもってそのように言い切
ることが出来る。

大学紛争は何時終わったのか。学生委員長を引受けてもいいよとか、
学生部長ならなつてもいいよという声は、少なくとも紛争が続いてい
たときは聞かれなかった。紛争が沈静化した時、一転して多数の人が
やつてもいいよと名乗り出たのには驚いた。そしてその時私は大学紛
争はやつと終わったと実感したのであつた。

困難な紛争の局面にあつて、よく今日の事態に回帰出来たのは、多
くの方々が力を結集して難局の打開に協力したからこそと確信する。
その為自己犠牲を払って迄努力を惜しまれなかった多くの方々にか
らの敬意を捧げ、感謝の意を述べたい。多くの方々の中には既に他界
された方も居られる。私の想いは充分に届かない迄も、方々のご冥福
を謹んでお祈り申し上げる。また、本座談会を企画し、諸事務を司り、
そして録音テープの掘起こしや文書化、それが勝手なことを勝手な言
葉で喋り捲る徒輩である私共を相手にしての仕事となると、大変なご
苦労であつたと拝察し、ここに併せて文書館の皆様にも深甚の謝意を
表したい。

二、悔恨

半年に及ぶ共闘派学生の広島大学本部キャンパスの封鎖は警察機動
隊一、二〇〇人の手によつて解除に漕ぎ着けることが出来た。警察が
戦時中に作られた治安維持法の立場からする思想統制を戦後直ちに完
全に払拭したとは言えない状況にあることが、勅令三一一号違反事件
の学生処分の実情からも察せられる。当時大学は警察権が大学に入る

ことに極めて慎重であったと言える。その配慮にも関わらず我々学生委員会が描いた自主封鎖解除の夢は長く苦しい折衝の末遂に潰え、警察力に依存する封鎖解除が最後に残された手段となった。我々は大学の伝統を汚した汚名を着ることを躊躇うことさえ出来ない程窮地に追い込まれていた。唯一の救いは封鎖解除強行の間、一人の死者も重傷者も出さない約束が守られたことであろうか。残念な事は最後まで共闘派学生の言う本部岩に籠城した三〇数名の学生がいたことで、いかに説得するも彼等は革命に殉ずるとして、その意志を翻さなかったのであった。

今にして思うと、我々が彼等急進派学生に対応する以前に、まず我々の考えと活動家、Activist、の考えとが如何に食い違いかを十分に明確にしておくことが必要であったのかも知れない。教員の間には考えの幅に広さがある。一般学生でも然りであるが、急進派に限って言うとその考えは硬直していて些かの余裕も認められない。その違いを認識して置かないと何十回団交を繰り返しても、双方に疲労と不満が残るだけで、交渉は埒りないものに終わるのである。彼等は我々の回答が彼等の主張に合致しない限り我々の発言を回答として受け取らないのである。

私達は普段教室において様々の学生と話し合ってきたし、学生が私達の話を理解しない時は、色々と視点を變えて話し合い、相互理解に資してきた。特に新しくそして高度の知識を伝える時は色々な言い回しでその理解を助ける労力を惜しまなかった。我々は新しい知識の開発に共に手を携えて励む連合いとして学生に対応してきたし、また学

生は何時の日か我々の水準を乗り越えて更に高度の見解へと進む可能性を秘めた存在と見做して学生を待遇することも我々は心得ていた心算である。次世代に負う学問の進展の否定を突き詰めて考えれば、学問の進展を次の世代以降認めないという傲慢な態度と言うことになる。

大学紛争の初期、共闘派学生との団体交渉に臨んだある教授が共闘派学生を「突然変異で発生した蝗の大群」と評したことがあった。それも一つの見解ではあるが、それでは学生との交渉はなり立たない。いかに年齢の差はあろうとも傲慢な態度で学生に接することが好ましいとは思えない。そのような態度が反って話し合いの場を壊し、お互いの無理解呼ばわりを増幅した拳句の果て紛争を拡大する原因となったかも知れない。

アメリカに留学していたある日の食後の昼休み、私が大学院生達と語り合っていた時、化学学部長のショパン教授がやってきて我々の話仲間に加わった。学生が学部長に質問した時学部長は「Yes Sir...」と相手に敬語を使って答え、学部長が学生に質問する時は何時でも「Could I ask you...」と最大限に丁寧な表現を使って居られたのをふと思い出した。これは穏健な一般学生に対応する時の言葉であるが、「The secret of education lies in respecting the pupil.」という格言の意味も分かるうというものである。

偶々紛争中の過激派学生の暴力が我々の間で問題になったことがある。学生派閥間の争いでは何人かはランチを受けて、その手当てを必要とした。他大学ではランチにより死者迄出たことが報道されたが、

廣大ではその例は幸いにも無かった。

暴力的学生として話題に挙がった一人にTという学生がいた。彼は第九回広大教養部祭副委員長として、教養部祭のテーマである「ガレキを掘りおこせ」なる主題を取り上げ、学生への檄文を草している。そこで彼は「資本主義体制下に地中に埋め込まれたヒロシマを消し去り、単なる幻影に過ぎない戦後民主主義を、正しく掘り起こそう」と主張している。正しい歴史観を消し去った過誤に象徴されると彼が考えたのは「安らかに眠って下さい、過ちは繰り返しませぬから」という原爆公園の慰霊碑の碑文であると彼は考えた。この碑文は広大教養部の雑賀（サイカ）教授の作と聞く。以前からこの碑文には主語が無いので自らの過ちを認めているようにも取れるとの批判がある。一億総懺悔と言われた時代である。それに対して人の道に外れているのは原爆を作り、それを爆発させて多数の人間を殺傷した側ではないかという批判がある。それで原爆犠牲者よ安らかに眠れとは何という事だ。「みんなツルハシを持って！アスファルトを打ち壊せ！ガレキを掘り起こせ！」と訴えていた彼、その後彼が後日、暴力主義者と名指しされ、検察当局に摘発された。「我々が拒否するものは大衆社会化情況と言われている現代社会であり、あらゆる真実とその一見華麗な皮相を覆い隠さんとする現代社会である」と彼は正門前で只一人、マイクを握り締めて繰り返し繰り返し叫んでいた。その彼の主張は、当時の学園祭のパンフレットに縷々述べられている通りである。彼が告発された事情や後で釈放された事情は私達には分からない。後日彼とは彼の出身地沼隈で偶然出会った。彼は生業に励んでいて、静かに彼と

話し合ったが暴力的気配など私は些かも感じなかった。偶々彼が正門付近に立て看板を立てようとして、杭を立てる穴を掘った時、そこにあった東千田キャンパスへの電源のメインケーブルを誤ってショートさせ全学停電となった。その責任は彼にある。それが彼を暴力主義者と見做すことに繋がったかも知れないが、事は飽くまで彼の過失に過ぎない。彼が何でも破壊すればよいとするラッダイト (Luddite) の徒輩と私は思わない。嘗て学生達に暴露されて問題となった事務局庶務部の手になる「隠しカメラ」や「抜け穴」の設置が如何に紛争の処理を困難にしたことか。再度その愚を繰り返すことは知性の府には似付かわしくないと確信する。当時を顧みる機会がある度に私の脳裏を掠めるこの事実はトラウマとなって私の記憶中枢に焼き付いている。結果として幾多の若者の将来を誤らせてしまった事への責任はこの治安維持法の亡霊のなす業か、今となってはもう昔を今に帰すすすがは無い。

三、惜別

私はフルブライト研究員に採用されて、やっと手にしたこのチャンス、それも教養部教員なる故に一年の延長申請を削られてやっと認められた六ヶ月延長を日曜も祭日もない実験又実験の死にも狂いの精進でやっと完成した四編の論文を抱いて家族皆がいる日本への旅路についた。将来は生体における電子移動機構の速度論解明が最も重要な研究テーマであると考え。行き詰まっていたその実験上の問題を見

事に解明できて Delahay 教授から称賛の言葉と、帰国後の研究継続に関する好意ある提言迄戴いた私は帰国するや直ちにその研究を展開すべく細々と乍ら準備を始めていた。その折も折全国的に始まった大学紛争は私に研究の中断を余儀なくさせた。そして紛争の沈静化は四年、いやもつと長い六年近い年月を私に浪費せしめたのであった。やつと勇を鼓して雑務からの下番を部局長会議にお願いできた時は、元々乏しい私の頭脳の働きも手足の器用さも自覚出来る程失われていた。その時医学部薬学科に私のチェアーを用意したから、多少経験も業績も足りない助教教授のワンポイントレリーフに来てくれないかと頼まれた時、もう定年迄数年の命なので残りの人生を医学部で何か世の為人の為になることに捧げようと誘いに応じた。レコンキスタ (Reconquista、イスラームによって失ったスペインの失地回復運動) 以外もう広大に私の生きる場所はないと観念して紛争解決に加担し、一臂を貸したのであったが、それが四年いや六年も掛かるうとは私の大きな誤算であった。戦時下の大学に助手として奉職し、軍事研究に夜を日について働き、戦争の末期から敗戦にかけては原爆の惨禍に喘ぎ、それが終わるや教授間の軋轢による恩師の追放の憂目に逢い、新制大学では教養部に放り出された身の腑甲斐なさを託つ結末となったのである。我身の不運を託つより、人の世の浅ましさを嘆く気持の方が強かったのではあったが。

嘗てルイジアナへ留学の頃、電極反応の電子移動速度の一千万分の一秒という高速測定に成功し、それが電極反応の究極の速度と目されることから Delahay 教授は我らはオリンピックゲームに勝ったよと

喜んで下さった。そのことが今も念頭から離れない。Delahay 教授は今もバリの中央部セーヌ川に浮かぶシテ島で老後を過ごして居られると聞く。その後の私の何回かのヨーロッパ旅行で、一度先生にお会いしたいと願ったが未だにその目的を果せないでいる。私は留学当時のアメリカ化学会物理化学誌に掲載されたその四編の論文が二〇〇編を超える私の全業績の中で最も優れたものと自負している。

今反省してみると、私は自分の畢生の仕事を完結しなければならぬ時、徒にその機会を逸してしまった。幾ら悔やんでも悔やみきれない。その機会を放擲したのは、その背景の事情如何に関わらず、自身の責任である。私が戦うべき相手は誰であろうか私自身だったのである。相手は決して私を苦しめた学生達でも教職員仲間でもなかった。

今私は私の相手は私自身の心なのだと言った。人間が人間として人間らしく生きることなくして、如何に恵まれた環境を夢見ても、そこには何も無いことを知らねばならない。

足掛け四一年に亘り、私の知性を育て下さった広島大学、そしてそこで苦しい時も楽しい時も共に働き共に励まし合って下さった皆様への私の感謝と訣別の言葉をここに述べたい。この年齢迄妻と共に生き永え、四人の子供達とそれぞれの配偶者として一〇人の孫達に恵まれて老後を安楽に過ごしていられるのも全く皆様のお陰、皆さん長い間どうもありがとうございました、さようなら、どうぞお元気で。

(二〇〇七年九月、広島北郊高取の住居にて誌す。)

封鎖解除強行後の学内動向と事後処理

封鎖解除強行直後、教職員間にも学生間にもそして市民にも様々な反応が現われた。強行措置を妥当とする人がいる一方で、様々な立場からする批判も多くあった。授業再開の時、北門一杯に座り込んで入門を妨害した学生に対し、学生部次長は敢然と牛蒡拔きの拳に出た。これには教職員も驚いた。その行動は如何にも機動隊を背景に勝ち誇ったように見えたからであろう。共闘派学生は即刻これに抗議して次長を弾劾し、その辞任を求めてきた。この次長への非難に対しては、牛蒡拔きで被害者が出たわけではなく、通行の妨害にこそ問題があるとして、次長の責任を問う理由は無く、その辞任要求など全く無用であることを学生委員長名で回答した。

寧ろ、当面すべき問題は学長が団交で認めた「学生部解体」を如何に受けとめ、如何に対応するかにある。この学生部解体問題は去る五月の学長団交で共闘派が使った言葉で、事務局が秘かに過激派学生のデモや集会を監視するために東千田キャンパスのあちこちに設置したという隠しカメラや大学本部庁舎の四階にあった学長室に秘かに出入りできる三階からの隠し階段などが本部棟の封鎖占拠学生によって暴かれたことに端を発する。これが学生部が取った措置と誤認され、学生部解体の要求に発展したものである。その事を知らなかった新学長は学生の発言をその儘受けて学生部解体を容認した。しかし一九七二年五月一〇日付けの学内通信に遅れ馳せながら発表されたように学生部はこれに何ら関わっていない。これは事務局庶務部が秘かに設置し

たものという。学生部が過去の戦争以来学生の思想取締りの任に当たるとする通念がこの誤解に繋がったものであろう。学生はこの認識に立つて学生部解体を要求したものと解せられる。であるなら学生の要求は学生の思想調査等を無くせと言うことにその本意があったとすべきである。学生部の日常業務を無くすれば、奨学金や住居、就職斡旋、課外活動に関する学生支援業務が停滞し、困惑するのは寧ろ学生自身である。学生支援業務を除外して「学生部解体」を煎じ詰めれば、残るのは過去の治安維持法の残骸とも見える思想統制のみである。これは学生部から、いや大学から根こそぎ払拭すべきことである。私はその事に関し封鎖解除強行後擡頭してきた四者共闘グループと数回の交渉を持った。五回目か六回目の団交の場に、突如今迄に現われなかった新しいグループが現われて交渉課題を「同和問題」に切替えた。そして私個人の同和認識に始まり、学生部として同和問題に如何に対処するかその具体的方針を問うてその折衝は終わった。その直後四者共闘グループの代表が突如壇上に立ちあがって今迄継続して来た団交の終結を宣言した。その団交の様子を記録した一〇本余りの録音テープを私に手渡し、私を囲んで会場から大学本部棟の学生部迄送って呉れた。そしてそれ以後私は団交から解放されることになった。

それから数年後の竹山学長の時代、同和問題がトイレの落書を切っ掛けに再燃した。そしてどうした訳か、当時の学生委員会は委員長以下全員が突然辞任した。私は学長に頼まれて、出戻り委員長として学生委員会を再組織し、同和問題に対処することになった。その時は少数の学生と私の研究室で話し合うことで済み、困難な問題になる事は

無かった。これには後日学生部長になり、就任中肝臓癌で殫れた畏友田辺昌美教授（英文学）のご教示に負う所が多大である。謹んで田辺教授の冥福を祈り、改めて感謝の意を表したい。

県警機動隊による「学内警備」を何時まで続けるか、学内警備を順次教職員による自主警備に切変えることは、少数の警備員しか持たず、キャンパス・セキュリティも置かない日本の大学では必要と考えた。しかし、全学の賛成を得ることはかなり難しいと予測した。教職員自らの手で研究と教育の場を守ろうと呼掛けたのであったが、時が時、皆さんは協力して快く参加して下さった。そして県警による警備も、警備保障会社による警備も漸次減少させ、三ヶ月後は常態に復することが出来た。これには全共闘派の戦術転換が大きく影響したが、その根源には教職員と一般学生の正常化への強い願いの支えが大きい。

「学生準則の一部撤廃と改正」学生団体の結成、集会、掲示、学内放送に関する新規定は封鎖解除の一ヶ月後、一〇月一日付けで公布された。これは学内における学生の地位の新しい認識に基づく改正で、学生団体の結成は許可制から届出制へ、学内施設は利用者の責任において利用することとし、掲示の制限は設備上可能な大きさとし、マイク放送や学内デモは授業の妨害となるので禁止とした。設備上従前の規制の存続止むなしとしたものもあるが、基本は可能な限り大幅に自由化したものである。

封鎖の強制解除後、福山、東雲（共に教育学部）、南千田（工学部）の各キャンパスは東千田と同様の状況にあったが、霞キャンパス（医学部、歯学部、両学部の付属病院、原医研）の医学部のみ封鎖状態を

継続していた。当初医学部では、職階制の廃止、学位の廃止返上、ジツツ病院解放、製薬資本からの委託研究の拒否、講座経理の公開、診療科再編成、解体後の診療科内連合組織の保障、低医療費政策反対運動の展開の八項目要求を掲げて闘争に入ったが、一〇回に亘る学部内団交でも埒が明かない儘、同年七月二四日から「封鎖占拠」に入ったのであった。その後医学部教授会は提起された要求に対し数回に亘り文書で回答した後、一〇月一三日からの授業開始を宣言した。封鎖に反対する学生達はこれに応じて封鎖の自主解除を小林医学部長に申し出たようである。一〇月一九日私は小林医学部長からの電話連絡を受け、同日夜己斐上の拙宅に一〇名程の封鎖反対派学生を迎えて、封鎖自主解除の手立てを協議した。その内容は怪我人が出るような事態は絶対に避けること、必要あれば警察の出動を小林医学部長から要請すること、バリケード解体に要する道具は施設部長のもとで準備し早朝八時半に現場に届けること、解体したバリケードの資材は一時にやってくる予定の大型トラックに積上げることなどの打合せを終えたのは夜一〇時過ぎであった。明くれば快晴、封鎖自主解除の当日、私は封鎖の内と外両側が見える第一内科浦城研究室を借りて封鎖解除の進行を見守った。バリケード内側では封鎖派の学生三〇名程が隊列を組んでデモをしていた。そしてその外側ではバリケードの解体が粛々と進んだ。解体されたバリケードの資材が到着したトラックに手際よく積上げられる頃は、デモ学生の姿は全く無く、バリケードの自主撤去は平穩裡に終了した。

以前から約束し、文部省や広大から認可されていた一ヶ月間の琉球

大学での集中講義を恙無く終えた私は、復帰二年前の沖縄の一日も早い復帰を祈り乍ら広島へ帰ってきた。

帰り着くや、文部視学官として本省へ転任された浅川淑彦学生部長の後任を飯島学長から依頼され、今迄の行掛かり上断り切れない儘に一年の就任を承諾した。私に託せられた仕事は学生部解体と言うより「学生部業務の再構築」である。私の目下の急務は学生部から「公安調査的色彩のある部分を洗い浚い払拭する」ことで、職員による研修以外にあるもの迄洗い出すという困難な仕事である。職員による研修に外に有効な方法も考え着かない儘に、幾つかのテーマを挙げて研修に取り掛かった。然し次長、課長、係長そして一般職員と職階制の中で全員に成果を期待することは困難である。職員は命ぜられる儘に業務を遂行することに馴れ、自ら問題点を発掘し改善するなど全く不慣れであった。学生部職員と事務局職員との交流も図ったが、それが成果を挙げるには時間が必要であった。

早急に改善を要する問題に街頭デモに参加したことだけで奨学金を停止された学生の救済や不当に処分を受けた学生の名誉挽回があった。私は飯島学長と一緒に育英会へ赴き、そこで只一枚の育英会からの通知で「育英資金」を打切ることが決して適当な教育的措置と言えないと縷々述べて、その処分の撤回と全ての教育的指導を大学に委ねることを主張した。育英会長はそれを了承して受け入れて呉れた。後日学生部長の職を退いてから、その時の代わりと言う訳ではないが、アメリカ、ヨーロッパにおける育英奨学制度の調査を育英会から頼まれて、一ヶ月間の調査旅行に出掛けることになった。その時の調査報

告書は大蔵省への予算折衝に使われ、育英資金が年額四五〇億円から六五〇億円に増額になったと言うことであった。

当時学内はまだ騒然としていて何時騒乱が発生するか分からない情況にあり、学生は紛争中期と変らない鬱陶しい雰囲気の中で、ともかく教室にだけは出席していた。生まれ変わった学生部の姿を先ず学生に阐明する必要があると私は考え、停止処分を受けた奨学生の復活や団体結成の自由などを大きく掲示した。そして徐々に年次企画を発表した。しかし未だ当時は一年切りの兼務と思っていた。然し改革委員会の学生部解体案は何時までも発表されない儘に、私の任期は次の一年に移り、やっと学生部長選挙規定が出来たのはもう一年後、そこで私は改めて二年任期の部長に再選されたので、四年もの長期間学生部に奉仕することになった。

嘗て若い軍人が犬養総理を襲ったとき、総理が「話せば分かる」と言ったのに「問答無用」と答えて総理を射殺したという話は、人口に膾炙されているが、全共闘も四者共闘もその若者と同じで団体交渉とは名のみ、相手の話に耳を貸す気配は全く無いと言ってよい。彼等が「答えろ」と叫ぶからそれに答えると、それでは答えにならないと言う。彼等は自分の要求する答しか、答とは思わないのである。相互理解があつてこそ初めて交渉は成り立つのである。言葉を変えれば自己顕示欲が強いとか非妥協的だなどと彼等の性格を表現できるであろう。その強い自我も紛争が次第に沈静化するにつれて次第に薄らいでいった。その中で、「何を為すべきか、何が出来たか」が私が追求した重要課題であった。

以後の記述には多少時間的な前後があるがその後の数年間の企画を次に羅列しよう。

全共闘の「八項目要求」には既に文書回答は出されていたが、「生協設立」など具体的にはまだ問題の多いものであった。全構成員の生の生協はいかにあるべきか、蓼丸厚生課長を中心に学生に協力して検討して頂き、成案を得て設立申請に漕ぎ着けた。問題とされた経理には公認会計士を入れ、教職員、学生より平等に理事、監事を選び、真に構成員による構成員の為の生協となった。書籍の廉価販売に対して市中書店からのクレームがあったがそれも乗切り、年を経る毎に規模を拡大し乍ら設立数年にして学生教職員の日常必需物品の供給のみならず、専門書、保健、衛生、旅行等正に生活全般に亘る事業を展開した。

紛争時の大学と学生の関係は学問知識を与える側と与えられる側という結び付きであった。当時大学では社会的ニーズに呼応して理工系学部の拡大は図られたが、それにバランスする人文系の充実は余り見られなかった。昔の学生生活でも一般教養書の手近な場での入手が必要だったことが思い出される。又紛争以後学生の大学への帰属意識が何か空々しくなっているなど、欠落した側面を助長する必要を感じた。それをもっと自然な態様に導くこと、それには現在の閉塞的の学生生活をもっと開放的にすること、本来社会から多少とも離れて孤高をよしとする学問社会の傾向をもっと開放的にすることが必要と感じて色々な行事を展開した。その初めは封鎖解除の時学生の火炎瓶で半焼した学生サークル部室を撤去し、跡地へ「体育館と水泳プールを新設」

昼休みなど教職員、学生の自由な利用に供した。南千田と霞、福山キャンパスへの「テニスコートの新設」も同様な趣旨からであった。次第に手を広げて、体育会の協力を得て始めた「全学卒業祝賀会」や上級生リーダーを配した「新入生歓迎オリエンテーションキャンプ」、中国四国国立九大学共同利用施設「西条研修センター」の設置申請と施設長などの人事配置、「西条総合グラウンド」の整備と合宿所の設営、開学以来数回しか開かれなかった「大学公開講座」の復活とテレビやラジオ放送の利用、「外国人留学生の受入」制度の制定と他大学との「単位互換制」の制定、「保健管理センター」の整備と「中国・四国大学保健管理研究会」の立上げと開催等である。これらの行事の幾つかは三〇数年も経過した今日迄継続しているものもある。保健管理研究会はその一つで、初期には学生の肺結核等の感染症や種々の原因によるドロップアウトが大きな問題であったが、最近では幼児予防接種を忌避した事による予測も出来ない麻疹、百日咳の流行とか、アスペルガーなど難しい青春期の問題の処理に当たって、研究会への参加大人数も参加人数も初期に比し数倍も増加している。公開講座は、難しい理論を分かり易く解説したり、共通性の高い問題を取り上げることが放送大学に委ねるとするも、瀬戸内、ヒロシマ等地域関連性の高い課題を取り上げる等してエクステンション・サービスの実をあげることが望ましい。大学が法人化した今、象牙の塔と言われた殻を破って地域住民の身近のニーズに答えることが一層重要であると考える。

私達はこの度の紛争処理当初の紛争解決の為に学生の手を借りないことを委員間で取り決めた事は飽くまで大学の教職員の責任であると

認識し、長い紛争の間に一、二度あった学生からの申し出も謝絶した。学生同士間に流血の争いが起こった結果はどうなったであろうか。最後に、当初の申し合せを遵守できたことは何よりであったと述懐する。書き終わって読返してみるといかにも手前味噌の記述が多い。老人の戯言（タワゴト）と御許しあれ。

（二〇〇七年九月高取宅にて）